

Chronicle of Team Japan in Asian Games

[日本チームアジア大会小史]

第1回 1951年ニューデリー大会 (インド)

——戦後初の国際大会で躍動——

戦後、日本にとって国際舞台への復帰となった大会には、男子25人、女子8人の選手(助監督の西田修平、児島文を含む)が参加。大会初日から、男子10000mで田茂茂一、高杉良輔の1・2位など日本は大活躍。男子は24種目のうち11種目で優勝を飾り、女子は、吉野ト子子の投てき三冠(砲丸投、円盤投、やり投)など、9種目で全てに優勝した。

第2回 1954年マニラ大会 (フィリピン)

——赤木が2種目で日本新V——

フィリピンで開催されたが、日本は男子10種目、女子7種目で優勝した。男子400mの赤木次夫は、48秒5の日本新で金。1600mでも優勝に貢献した。また、男子400mRはアジア新で完勝した。女子では、南部敦子が100m優勝のほか、200m、走幅跳、400mRで2位に入った。

第3回 1958年東京大会 (日本)

——初の日本開催に満員の観衆が沸く——

落成間もない国立霞ヶ丘競技場で開催。トラック最初の決勝種目・男子5000mで井上治が2連覇を果たし、大会は幕を開けた。最終日の日本は、女子400mRで日本新をマークし優勝、男子1600mRでも圧勝。日本は男子5種目、女子7種目で金メダルを獲得し、観衆を沸かせた。

第4回 1962年ジャカルタ大会 (インドネシア)

——男女フィールド種目完全制覇——

2年後に東京五輪を控えた日本がフィールド全種目(男子8種目、女子5種目)を制した。男子は、棒高跳で盛田久生が日本勢4連覇を果たしたほか、三段跳では桜井孝次が前回大会の雪辱。走高跳の杉岡邦由、砲丸投の糸川照雄、円盤投の梁川昌三は、日本勢として同種目初タイトルを獲得した。

第5回 1966年バンコク大会 (タイ)

——澤木が中長距離で2冠——

猛暑下での開催ながら、男子中長距離の活躍が目立った。1500m、5000mでは澤木啓祐がともに大会新で優勝。土谷和夫は5000m2位ながら、10000mでは白井吾との接戦を制して優勝。マラソンでは君原健二、重松森雄が1、2位。3000mSCは猿渡武剛が制した。日本は男子11種目、女子7種目で栄光に輝いた。

第6回 1970年バンコク大会 (タイ)

——男子マラソンの君原が2連覇——

韓国内部事情から会場がソウルからバンコクに変更された。男子マラソンでは、メキシコ五輪2位の君原健二が2連覇を達成。男子100mは神野正英が日本勢として初制覇、200mでも2位に入った。男子400mでは友永義治が46秒6の日本新で優勝した。女子やり投は森田信子が大会新で制し、日本勢6連覇を果たした。日本は男子13種目、女子6種目で金メダルを獲得した。

第7回 1974年テヘラン大会 (イラン)

——高校生、木川が男子棒高跳を制す——

中国の初参加もあり、日本の優勝は男子6種目、女子4種目にとどまった。そのなかで、17歳の高校生、木川泰弘が男子棒高跳で日本勢7連覇を達成。男子ハンマー投は、室伏重信が連覇を果たした。女子400mRは、46秒62の日本新で3連覇を果たした。

第8回 1978年バンコク大会 (タイ)

——金メダル数で中国に次ぐ2位に——

12種目を制した中国に対し、日本勢は金10個(男子9、女子1)に留まった。初日の男子棒高跳では、高橋卓巳が5m10の大会新で制し、第1回から続く日本勢の無敗を保った。男子ハンマー投の室伏重信は、アジア大会の陸上個人種目で初めての3連覇を達成。女子1600mRでは、女子唯一の金メダルを獲得した。

第9回 1982年ニューデリー大会 (インド)

——磯崎が女子短距離4冠——

注目された日中の金メダル争いは日本15、中国12と雪辱した。男

子ハンマー投は37歳の室伏重信が71m14の大会新で4連覇し、MVPに選ばれた。男子棒高跳は、前回に続き高橋卓巳がV。男子400mでは、高野進が男子短距離の個人種目で3大会ぶりの金メダルに輝いた。女子では、磯崎公美が200m、400m、400mR、1600mRすべてで日本新での4冠を達成した。

第10回 1986年ソウル大会 (韓国)

——男子ハンマー投の室伏が5連覇——

2年後に五輪開催を控えたソウルで開催。男子400mでは高野進が45秒00のアジア新で連覇。1600mRもアジア新記録で制した。男子ハンマー投の室伏重信は5連覇を達成。男子マラソンでは中山竹通が2時間08分21秒で圧勝。谷口浩美が2位に入った。初開催の女子マラソンでは、浅井えり子、宮原美佐子が1、2位となり、日本は11種目(男子9、女子2)で金メダルを獲得。

第11回 1990年北京大会 (中国)

——400m2連覇中の高野が200mでV——

地元中国が29種目で金メダルを獲得した一方で、日本は7種目(男子6、女子1)に留まった。十種競技では、金子宗弘が大会新で優勝。父・宗平も第4回大会の円盤投で3位に入っており、親子でのメダリストとなった。男子200mでは高野進がこの種目の日本人優勝。男子長距離は、23歳の森下広一が10000mで金、5000mで銀を獲得。3000mSCは山田和人が制し、日本勢7連覇を果たした。

第12回 1994年広島大会 (日本)

——高岡が長距離2冠達成——

36年ぶりの日本開催では、男子10000mで高岡寿成が平塚潤とのマッチレースを制して日本人金メダル第1号に輝いた。高岡は5000mも制し、長距離2冠を達成。男子400mHも日本勢対決となり、刈部俊二が斎藤嘉彦との同タイム対決を制した。男子走高跳は、前回3位の吉田孝久がV。男子400mRは第2回大会以来の優勝を果たした。

第13回 1998年バンコク大会 (タイ)

——女子マラソンの高橋が大躍進の口火に——

大会初日の女子マラソンで高橋尚子が戴冠。自身のもつ日本最高記録を一気に4分01秒も更新する、2時間21分47秒のアジア最高を打ち立てた。男子ハンマー投では、室伏広治が日本新(78m57)で父・重信に続く親子優勝を果たした。男子短距離は、伊東浩司が100m、200m、400mRで3冠。100mの準決勝では10秒00のアジア新をマークし、大会MVPにも輝いた。日本は、前回の不振から一転して12個の金メダルを獲得した。

第14回 2002年釜山大会 (韓国)

——不振に終わるも、室伏、末續が金——

中東勢の躍進もあり、日本は金メダルが史上最低の2個に。男子ハンマー投は前回覇者の室伏広治が大会新で連覇。男子200mの末續慎吾は期待通りの金メダルを獲得した。前年の世界選手権男子400mH3位の為末大は3位に終わった。女子は、5000mの福士加代子(2位)、400mHの吉田真希子(4位)、砲丸投の森千夏(5位)、豊永陽子(6位)の4人が日本新をマークしたが、優勝はゼロだった。

第15回 2006年ドーハ大会 (カタール)

——末續が貫禄の2連覇——

翌年に世界陸上大阪大会を控えた日本は、5種目で優勝。男子200mは、03年世界陸上3位の末續慎吾が2連覇を達成した。女子10000mは、福士加代子が独走で前回大会の雪辱を果たした。女子走幅跳の池田久美子は自身の日本記録(6m86)に5cmまで迫る好記録で優勝を達成。そのほか、男子棒高跳の澤野大地、男子400mHの成迫健児がアジアチャンプに輝いた。

第16回 2010年広州大会 (中国)

——福島が日本女子初の短距離2冠——

翌年のテグ世界選手権、2012年ロンドン五輪を見据えた日本は、金4、銀8、銅8と計20個のメダルを獲得。なかでも強烈な印象を残したのは女子100m、200mで2冠を獲得した福島千里で、エースとして圧巻の走りを見せた。また、やり投は、男子の村上幸史、女子の海老原有希がともに自己新で快勝だった。